

ざいそう

少林寺拳法との出会い・そして今

佐藤 芳 邦



—合 掌—

昭和60年4月、転勤で東京本社の仲間と少林寺拳法の法縁有志に見送られ、この杜の都・仙台の地に降り立ち、あっと言う間に、21年の月日が流れてしまった。

少林寺拳法との出会いは昭和46年、今から35年前に遡る。戦後まもない昭和22年初代師家宗道臣によって日本で創始され、日本の高度成長に合わすかのように全国的に広がっていった少林寺拳法。何か夢中になって続けられるものはないかと模索していた時に友人の紹介で少林寺拳法を知る事になる。血気盛んな20歳の春であった。

仕事はエンジニアリング部門で朝から晩まで図面と睨めっこの生活。友人が勧めてくれたこともあり、道場を見学。実業団の支部であり、皆社会人の集まりである。道場に入ると「合掌礼」で迎えてくれる。道場・玄関の履物が整然と並べられている。白・茶・黒帯の面々が、鋭い気合と真剣な眼差しで技を掛け、掛けられ「合掌礼」で終る。

実に楽しそうな雰囲気、初めての私にも伝わってくる。子供の頃から野球に明け暮れ、体力にはちょっと自信を持っていたので、道場の先生の「おもいっきり突いて来ていいよ」と言う言葉に本気で突いたら、あっさり受け流され飛ばされてしまった。一見誰が見ても外見上は普通のおじさん、それがいざとなったら「目の玉から火花が出るような激痛が走る技が出る」世の中には未知の世界があるものだと思いき、即、少林寺拳法部に入門、以来三十有余年にわたって、「細く長く、途切れぬように」をモットーに「生涯現役拳士」を目指して、今、仙台の地で子供たちと汗を流す日々を送っている。

—自分と相手があつての少林寺拳法—

少林寺では、人と人が出会った時の自然な挨拶に相当する「合掌礼」から始まる。そして、握ってもらい、握ってあげて、ひっくり返し合いながら、私も上

手になりたいが、あなたも上手になりましょうと、互いの向上を積み上げていく。また、こうした練習形態を通して、己と他との関係、われも存在するが、われ以外の、自分とは様々に違った他も存在すると言う、この分かり切ったようですぐ忘れてしまう人間社会の事実を認識していく。しかも自他の存在・関係を認識する中で、自分の事だけでなく、せめて半分は他人の気持ちやら幸せを考えられる人間に自ら変えていく。少林寺と出会い、見習い拳士の純白道衣と白帯のように、いつも「初心に帰れる」気持ちを忘れないでいたい。

最近、毎日のように報道される「凶悪殺人事件」、幼い子供達が犠牲となっている。子供達を外で遊ばせない傾向が全国的に広まっているという。子供らが安心できる社会を築こうと学校を開放するなどして、地域ぐるみで取り組みを進めているというが、余りにも広がる凶悪事件の余波は、間違いなく子供と地域のみ込みつつある。子供を自由に遊ばせてやれない社会、誰を信じていいのかわからないと嘆く親、「知人も警戒」では日本の末期である。外で元気に遊ぶ子供達の声が聞こえる社会であって欲しい。

最近、子供達を道場に連れてくる親たちが急増している。そして、子供の入門と同時に親も一緒に少林寺拳法を始める人も増えつつある。「親の背を見て子は育つ」と言うが、思春期の子供達とも真剣に向き合う事が、後々親と子の絆をより強くするものと確信する。

人間は孤独で寂しがりの動物である。一人では生きていけない。社会との係わりの中で自分の居場所があれば幸いである。

漸々修学を主とする少林寺拳法の魅力に取り付かれ、仕事の合間をぬって道楽を続けてこれたのは、周りの人たちのお陰であり、今日も道衣を着れる喜びと子供達の笑顔に逢えることに感謝、そして結手。

—再合掌—